

京都大学	博士(文学)	氏名	荒 木 浩
論文題目	説話集の構想と意匠 今昔物語集の成立と前後		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、「説話集の構想と意匠」というテーマのもとに書かれ、その対象とする範囲を示して、「今昔物語集の成立と前後」と副題を付した。ここで言及する「今昔物語集」という呼称は、二つの意味で用いている。一つは、十二世紀、平安時代末期に成立したと推定される『今昔物語集』三十一巻(現存二十八巻)という浩瀚な説話集の固有名であり、本論文の中心的な考察対象の作品である。いま一つは、今昔／物語／集と分節される形態を有した文学史上の一態の謂である。すなわち、「今昔」(「今は昔」という冒頭言を、原則としてすべての伝承物語(＝説話)に付けて集成し、物語集を形成しようとする作品群としての説話集のジャンルを重ね表している。現存する作品としては、先述の『今昔』を始め、長承三年(一一三四)以前に成立した、栄源書写『打聞集』、平安時代末期以降に成立した『古本説話集』、十三世紀成立とされる『宇治拾遺物語』などである。</p> <p>そのいずれの意味においても起源的な位置にあるのが、宇治大納言源隆国(一〇〇四～七七)が撰述した「宇治大納言物語」である。ただし「宇治大納言物語」は、佚文と成立伝承等を残しながら、現在は散佚している。本論文は、この「宇治大納言物語」を和文で記された仮名説話集の起源的な存在と位置づけ、第一章を「〈今は昔〉の説話集—散佚「宇治大納言物語」をめぐって」と設定して論述の起点とする。続く第二章と第三章では、「宇治大納言物語」を根幹的な起源として成立した『今昔物語集』を中心的対象とし、作品生成のダイナミズムを考察する。『今昔物語集』は、釈迦の降誕に始まり、釈迦の創設した仏法の確立と伝流、そしてその周縁としての非仏教的世界を描く作品で、当時の仏教的世界観である三国意識を基軸として、天竺(巻一～五)、震旦(巻六～十)、本朝(巻十一～三十一)と分類して集成される。第二章では天竺・震旦世界を、第三章では本朝部を射程として、その形成と展開を追い、『今昔物語集』の構想と意匠を論じている。</p> <p>第四章は、「宇治大納言物語」の末裔としての『宇治拾遺物語』の達成を論じる。可視的に明確な枠組みを持たず、独自の手法で読者を誘うこの作品については、研究史上、「連想」という、独自のキーワードを用いて論じられてきた。本章では、この重要な操作概念を再措定するところから論究を進め、『宇治拾遺物語』の意匠と世界を論じる。</p> <p>終章は、本論文総体を改めて俯瞰した上で、対外意識の中での和文説話集構成の意義を論じ、本論文の結章としている。</p>			

なお、本論文には冒頭に凡例を兼ねた前言を布置し、第一章～第四章の巻頭には、内容の導きとなるような小文を付す。末尾には、本論文の基礎となった既発表論文の初出一覧を含むあとがきを誌し、併せて引用文献の出典一覧、人名・書名の索引を付している。

(第一章)

本章では、「今は昔」と始められる物語のかたちの歴史的事実性に焦点を当てる。作者と語り手と、そして伝承世界との間を劃する、和文的な起語として創始されたいこの語は、物語文学史上の嚆矢である『竹取物語』への付与によって、象徴的に登場する。ただし「今は昔」という起語は、『源氏物語』の出現がもたらした作り物語の飛躍と成熟の中で古びて意義を失い、いつのまにか捨てられていく。ところがその一方で、この形式は、あらたな文学史上の一態として復活する。「今昔」(=「今は昔」という冒頭言を、原則としてすべての伝承物語(=説話)に付して集め、固有の物語集を形成する説話集の方法の一環としてである。そうした説話集の起源的位置に、散佚「宇治大納言物語」がある。

本章は、この「宇治大納言物語」の分析を中心的な研究対象とする。まず第一節と第二節で、「宇治大納言物語」成立前史としての物語史をたどり、複層的な考察を重ねて、「今は昔」の発生と「宇治大納言物語」において「今は昔」が再生・復活する歴史的意義を論じ、そして「今は昔」の意味論に及ぶ。第三節では、「宇治大納言物語」生成の時代と状況を追う。源隆国撰述の浄土教書『安養集』成立と成尋の入宋の関係、そして第三期勧学会とがそれぞれ相関的に進行した、延久三年という年時と、成立の場としての宇治平等院の南泉房に着目する。そのうえで、源隆国の文学と学問、そして仏事のゆくえをうかがい、これまでの説話文学史に留まらない総合的な院政期文学史の視点から、「宇治大納言物語」の位置付けを考察する。第四節では、散佚した「宇治大納言物語」の輪郭をもとめて、院政期から鎌倉時代に生きた歌学者頭昭の著作を中心に、享受史の一面を歌学書の中に追い、その位相を論じている。

(第二章)

源隆国は承保四年(一〇七七)七月に没する。相応の時を経て、十二世紀をまたいでから、「宇治大納言物語」の直接的な後継者として、「今昔物語集」の名を負う、巨大な体系的説話集が出現する。本章では、『今昔物語集』という作品の天竺・震旦世界の形成と本朝部との関わりまでを射程として、その構想と意匠を論述する。第一節では、「今ハ昔」という起言を承け、「ケリ」で統叙し、「トナム語り伝ヘタルトヤ」と閉じる形式を徹底する『今昔物語集』の方法について、巻四巻頭の仏典結集説話の分析から、経文の「如是我聞」との類比を追求し、「今昔」という起語に込められた新たな意味と、作品存立との関わりを考察する。作品の根幹として、釈迦の降誕からその生

涯を描く巻一～巻三は、文字通りの経文世界に相当するが、『今昔』は、その外題に「天竺」とだけ標して、他の巻では通例として提示する、「付～」というテーマ設定を附さない。巻四に至ってようやく「天竺付仏後」、巻五に「天竺付仏前」と規定し、三国仏法史的世界を立ち上げていくのである。そこで第二節では、巻三という区切りと、巻四の冒頭話の結集というアクセント（＝「如是我聞」伝説）が指し示す『今昔』総体の方法と構想を論じる。第三節では、天竺部の最終巻五冒頭話の構成を分析し、そこに「廢墟の表徴」を読み取り、震旦部や本朝部と対比される国家創設と仏教世界との関連の中に見える始原的イメージを追う。第四節では、現存する『今昔物語集』写本の根源的位置にある鈴鹿本（京都大学附属図書館蔵）について、目録表題と本文表題のずれから、震旦部の構想と意匠形成を探る。第五節では、震旦部構成の基幹資料の一つ、中国遼代の非濁（一〇六三年没）撰『三宝感応要略録』の文献学的研究から、『今昔』震旦仏法史の方法を分析する。

（第三章）

三国の視界を希求する『今昔物語集』は、翻ってついに、自らの実在する、本朝世界の叙述に直面する。『今昔』は、仏法史的理想像としての三国史観からの投影と、現実としてあらがいがようなく現前する日本の歴史と、それを叙述する多様な、しかし不完全な資料群との間に、どう折り合いを付けようとしたのか。本章では、本朝世界を描く巻十一以降を、通説のように仏法部・世俗部と分節することをいったん排し、〈本朝部〉という塊として論じていくことでその問題を考えていく。

第一節では、本朝仏法部の根本資料である『三宝絵』の構造と三国仏法史観を分析し、説話文学史的視点から『今昔』の〈本朝部〉総体の始発を考察する。第二節では、『今昔』が受け止めた仏法初伝の意義と、日本仏法史叙述の根幹となる聖徳太子の形象との関わりを追いかけて、〈本朝部〉総体の始発の問題を論じていく。

『今昔』本朝部の構想を決定的に拘束することになる聖徳太子伝の構造は、仏法と、国史を基軸とする世俗世界とを一体的に捉える意匠としてイメージされる。その枠組みは本来、太子の生涯に留まらず、その前生をも一体的に描き出し、さらに彼の死後、大化の改新までの一連を、蘇我氏の因縁と絡み合った因果の相応として結構するはずのものである。ところが現存形態の『今昔』の本朝部の二つの起点（巻十一、巻二十二）は、その姿を、まるで二つに切断して配置したかのような意匠をなしている。聖徳太子伝から国史へ、という視点がここに見出される。第三節では、その単純化と分断のゆがみが、三国仏法史という、インドからの視界に彩られた『今昔』の世界史的視界でありつつ、同時に致命的な桎梏でもあったことを推論していく。ただしそのひずみとは、裏返せば、『今昔』という作品が内在する、展開への熱い意思の結果にほかならない。ポイントは、全三十一巻を最終形態とする現行『今昔』において、さまざまな論者が指摘する、巻二十五という、作品構成上の区切りである。第四節は、巻二

十五の武士説話の分析を発端として、卷二十一の欠落と、二十二～二十五までの輻輳する改編生成の痕跡をたどり、『今昔物語集』卷二十五までの区切りの意味と、そこから浮かび上がる『今昔』の「今」を考察する。

(第四章)

おもちゃ箱をひっくり返したような、とりとめのない混乱の中に、きらめく佳品の短編物語がちりばめられる。ただのカオスではない。どこかに統一の意思が働いているようだが、冒頭に付記される「抄出之次第不同也」ということばが象徴するように、その脈絡は、編者からは明示されることはない。しかし読者は、自分にだけはその真意がわかっていると、独り連想の得心を紡ぐ。読み手の数だけ交叉し、すれちがう恣意を、テキストの愉悦という感覚的な抽象としてだけ、共有する作品…。『今昔物語集』究極の末裔として、こんなイメージで評したくなる不思議な中世の作品が、『宇治拾遺物語』である。さらにこの作品は、序文で「宇治大納言物語」の伝説的な成立を語り、その生成と不分明な享受相の中に、連続と不連続とを曖昧に語って、自らを位置付けようとする。

この難しい作品に対して、研究史では、「連想」という、作者と読者との相渉るキーワードで、読解を試みてきた。その理解と運用は、いささか曖昧かつ恣意的で、時に論者を解釈学的循環に陥れて気付かせない、という問題があった。

本章では、「連想」行為という概念の再考から、論述の措定を行う。物語世界、言葉の連鎖、時間の構築、次第不同といういくつかのキーワードで、個々の説話とその背景にある伝承世界を深く読み解き、作品総体の理解へと還元していく。第一節では「異国へ渡る人びと」と括られる説話群を素材に、第二節では説話分析と人物の重複などから浮かび上がる「時間」をキータームに分析を進める。如上を受けて、第三節では、時間と言葉の連鎖についての分析を深め、第四節では「地蔵から観音へ」という説話分布に注目して、それぞれ「連想」が切り開く、物語時空の往還を考察する。そして第五節では、冒頭に注記された〈次第不同〉という言葉を追跡して分析を進め、この語に表象される本作品の物語世界を論じて、『宇治拾遺』論の結語的位置付けとする。付節は、中古から中世に至る散文の中で、〈なるべし〉という末尾表現をめぐる、「〈自記〉と〈他記〉とのあわい」を追いかけた文体史的考察である。『宇治拾遺』の特徴的な序文のスタンスを定位するために必要な分析として、布置してある。

(終章)

本章では、「宇治大納言物語」の成立を軸に、遣唐使廃止後、むしろ活発に行われた日宋貿易や対外交流史の中で捉えられる、古代・中世の日本文学史の問題を考察した。

「宇治大納言物語」の存立は、男性が仮名というシステムを用いて、仏教の世界観である、天竺、震旦、そして本朝という三国を等値に生き生きと捉える、物語の方法

を獲得したところからスタートする。そこには、仮名=和語という、日本固有のことばが、インドの梵語や中国の漢字・漢文に比べて、いかに独自ですぐれたものであるか、といういささか屈折した自国意識の自覚と矜持を内在していた。一方「宇治大納言物語」を承けた『今昔物語集』は、独特な漢字片仮名交り文をもちいて、釈迦の降誕から始まる、三国の仏教史を、日本語の物語として体系的に描くことを達成した。仮名のアジア文学としての「宇治大納言物語」という作品は、『今昔物語集』の方法に、決定的な影響を与え、世界史的な視野をもつ仏教文学としての重要な『今昔物語集』を生み出したのである。

本章は、本論文の起点と中心である「今昔・物語・集」と収斂する説話集の、文学史的生成と達成の意味づけに焦点を絞って論述したものである。表記と時代、そして世界観をキーワードに、あらたな視界から構想された統合と展開を織り込みつつ、仮名物語と説話文学史という個別的問題から、古代・中世文学史の総体的叙述に向けて、本論文を位置づけ、照射し、そしてさらには多くの批正の起点にもなることを企図している。

(論文審査の結果の要旨)

国文学研究の諸分野のうち、中世文学、ことに説話文学の研究が近年飛躍的な進展をとげたことは衆目の一致して認めるところであろう。『日本書紀』や『古今和歌集』などの古典作品に対する古註釈書群や、仏教書などの注説中の、しばしば奇想天外、荒唐無稽ですらある雑説話が謡曲や軍記などの中世文学の背景に広がることを見いだされ、中世のことばの世界がいわば立体的にとらえられるようになった。その結果、従来は文学研究の資料とさえ見なされなかった古註釈書、仏書、および寺社の文庫などに眠っていた聖教群にも新たな光が当てられるようになり、さまざまな新資料が発掘され、分析されることとなった。ことに昭和四十年代以降、卓越した研究者が輩出し、大著労作が陸續として出版される活況が現れたのである。論者は、その潮流にやや遅れて説話研究に参入し、先達の業績を貪欲に吸収する一方、国文学研究の世界にもようやく浸透してきた受容理論などの欧米の文学理論をも踏まえ、さらに東アジアの中に日本の文学をとらえようとする近年鮮明となりつつある視点にもよりつつ、説話研究をさらに深め、更新しようとする大胆な試みを続けている。本研究は、そのような論者の、『今昔物語集』を中心とする説話研究の集大成である。全四章十九節。七百頁を越える大著である。

本論文が全編において直接の対象とするのは、はやく散佚した「宇治大納言物語」と、それを中心的な起源とする『今昔物語集』、『宇治拾遺物語』などの説話作品である。それらがそれぞれどのように構想され、いかなる意匠として具現したか、という作品の発生についての分析とともに、それらがどのように読まれ、いかに認定されたか、という作品世界の享受の様相にも重点を置いて論じている。

第一章では、「今は昔」という物語冒頭の常套句の発生と展開、またその意義について総合的に論じ、『竹取物語』にあった「今は昔」の冒頭言を復活させ、各話ごとに付したとおぼしい散佚「宇治大納言物語」の文化史上の意義、及びその仮名文が持つ文体的意味を新たに定位する。

第二章と第三章では『今昔物語集』という作品を中心的に論じる。『今昔物語集』は、釈迦による仏法の確立と伝流、そしてその周縁としての非仏教的世界を、天竺・震旦・本朝という枠組みで描く作品であるが、第二章では、特に、仏教がインド、中国、日本へと西から東へ伝流したばかりではなく、実は、その伝流は移動にも等しく、インド、中国では仏法は衰え、日本にだけ本当の仏教が繁栄している、という日本的な「仏法東流観」の早い時期の展開とその影響が見られるものとして『今昔物語集』を論じる。そして、第三章の第二節「仏法初伝と太子伝」は、『今昔物語集』には、欽明天皇代の仏法初伝についての記事があえて無視され、本朝における伝来が聖徳太子に始まり、しかも太子を観音の化身としてとらえることが徹底されていることから、『今昔物語集』には朝鮮仏教の役割を意識的に排除する態度、さらに中国仏教への複雑な屈折、仏生国インドへの強い思慕が見られることを解き明かして明快な議論であった。

第四章では、『宇治拾遺物語』の達成を、物語世界、言葉の連鎖、時間の構築、次第不同といういくつかのキーワードを設定しながら、個々の説話とその背景にある伝承世界を深く読み解き、作品総体の理解へと還元していく。いずれも方法意識の明確な論文であった。

説話集の研究は、同類話の比較を通じて、作品の独自性を考察したり、描かれた人物や風俗をもって庶民の文化を論ずるなど、比較的単純な方法にとどまる研究状況が長く続いた。そのなかで本論文の斬新さは著しい。

しかしながら、その斬新さは論述を難解にすることがあり、また方法意識の明確、理論の先鋭は、個々の説話の読み方を時にゆがめることがなかったとは言えない。論者にはなお自重を要するところではあるが、本論文の大きな構想、力強い論証は、それらの瑕疵を補ってあまりあるものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十五年一月十一日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。